

作物別技術交流集会報告

りんご

らでいっしゅぼーや(株)農産部農産管理課 吉田 三千代

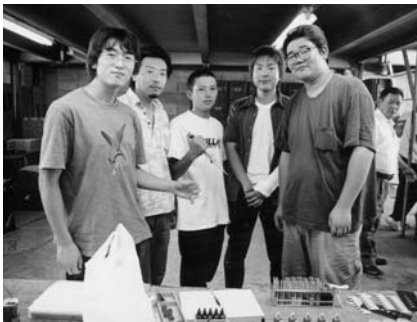
農薬を減らすやり方は色々あるのだと思った(木酢、マシン油)。土壌をしっかりとすることによって農薬を減らすことや樹を元気にしたり、りんごの味がよくなるということがわかった。土壌は重要……。アンケートの回答者はアップルファームさみず代表の山下勲夫氏宅で研修する農業大学校生の大坂健さん。その今回の集会とは？

Report

■絶好の時期の開催

らでいっしゅぼーやのりんご生産者とジャパンバイオファーム・代表取締役・小祝政明氏との出会いは1999年。三水村で開催された作物別技術交流集会「りんご」に遡ります。その年の11月、有志を募り、小祝さんの指導を受けている長野県下条村に訪問したり、以来数多くのりんご生産者が小祝流肥培管理に取り組むようになります。その後は「小祝塾」として2000年の長野県松川町、2001年の群馬県北軽井沢町と開催。生産者同士もお互いの圃場をつぶさに見て歩きました。

2002年7月25日、今回の舞台は青森県。若き後継者達が土壌分析、施肥設計で脂ののりきった親父さんたちをバックアップする新農業研究会さんが幹事生産者です。今年収穫するりんごにもまだ何かできる、来年のための施肥が開始される目前という絶好の時期の開催でした。



新農業研究会の若き後継者たち！土壌分析はおまかせ。

■肥料の散布時期を逃さずに

今回のテーマは「一個一個の品質向上」。らでいっしゅぼーやに寄せられた会員の声と品質検査の結果をつきあわせ課題を明確にし、その対応策を検討していただくとともに、小祝流肥培管理で変化している圃場を数値で認識していただきました。今回明確になっ

た課題は3つ。

- ① 長期間安定した高品質のものをお届けするためには
- ② しっかりした味のものをお届けするには
- ③ 農薬を削減するためには

それらに対し小祝氏のアドバイスのポイントをまとめると、基本は肥料の散布時期を逃さず健康な樹作りをすることです。

ポイント① ミネラル・微量元素は遅くとも9月の秋雨までに散布する。

ポイント② 秋根が動き出す(気温の下降が3日以上続くころ)前に貯蔵養分となる炭素つきのアミノ酸肥料を礼肥として散布する。

ポイント③ 春、根が動き出すと同時に必要となる養分を前もって準備する雪前肥は土の腐植増のためにも、窒素分にして50%の堆肥を取り入れるとよい。

小祝氏は上記適期の肥料散布がそれぞれ重要な意味があり、らでいっしゅぼーやの提示した会員クレーム、品質検査の結果などのデータと照らし合わせ、品質上の問題を解決するためのアドバイスをしてくださいました。

■農薬を削減するために

また、農薬を削減するための代替手段として、農薬登録されている展着剤のかわりにキトサンを使う方法、そのキトサンを殺菌効果の高い酢酸+クエン酸とともに活用することで殺菌、抗菌効果が長くなることや、一般的には農薬で対処する樹の病気「紋羽病」も、修復作用とかかわるカルシウム、マグネシウムの散布と途切れないよう窒素を少しづつ樹に吸収させることで樹勢を回復させるなどのアドバイスととも

に、それを実践された生産者の声も聞きました。

■土壌分析の重要性を実感

小祝式肥培管理を実施して3年目になる圃場のデータからは、樹がミネラルを吸収してゆく状態、ミネラル類が蓄積してゆく傾向、腐植を補充していない場合に見られる保肥力の低下などの様子がわかり、土壌分析は年3回、3年くらいは続けて圃場のクセを知ることの重要性をあらためて知らされました。

最後はこの肥培管理を確立できれば、高い品質でかつ収量もとれる倍倍計画の話で締めくくられました。

そして、今年の秋から、現実ががんばった分の評価は、自らが品質検査を実施し実感していただきたいと考えています。生産者の皆さんお疲れさまでした。がんばりましょうね。



今年の収穫がもう始まりましたね。みなさんの成果はいかに!?



プロフィール
吉田三千代
らでいっしゅぼーや(株)農産部農産管理課
60年生まれ。91年入社。現在は農産部管理で野菜のアスコルビン酸・硝酸、果物の糖度などの計測を受け持っている。モットーは美味しく食べられる身体作りと、熟睡できる体質作り。

Report